一袋棚は、本來の袋棚有、今紹鷗棚といふ、

一後の袋棚は、志野宗信が香棚を鷗作分して用、臺子及臺にも劣らず、万曲尺の調たる棚也、桐ノ白木又薄ぬり有、休○千利休も好み用、鷗ノ好ノ第一ノ棚なれば、休も桐を重くされしと也、香方ノ袋棚は、ランカンなど有て違ふ也、香サマノスカシも宗信が好といふ、

〔茶道望月集十二〕一此方に餘り不用爲なれ共、當時專用る四方棚といふもの有、成程形は古法の物也、眞中に二本柱あり、上下共にヒレ有て、上に成し方の棚板は廣く大き也、下に成し方の地板は小き形なる物也、○略中

一其外紹鷗の水指棚といふ物有、是は四方共、棚木地板にて中棚もある、兩脇上下の四所に茶碗すかしとて、志野袋棚の香ざまのごとく成すかし有、○略中

一三重棚といふ物有、四本柱有て、天井の棚地板共に四板也、是をセイロウ棚共云、此棚ヲ風爐圍爐裏にも置合て、座敷に常に用ひて、近世宗室抔の仕置かれしといふ人有、左にあらず、昔より有物也、然共古法には、此棚は勝手に置て、晴の茶事また高貴尊客の時、其日用る道具を此棚に揔而組付置て後、座敷へ持出候刻、此棚より段々次第能取おろして、座敷へ持出候時は、其具を敬ふ儘に用たる物也、一名仕懸棚とも云、○略中

一又四方棚といふ物有、是凡ての棚より小形成物也、是も四本柱有て、上の棚地板有、地板の上に建水面桶にふた置抔、竹の引切などは、入子抔にして入置程の間有て、中棚一枚入たる物也、

〔槐記續編〕享保十七年十一月廿日、口切御茶、參候、○略中

宗和袋棚　此形アリテ當年初メテ出來ス、袋棚ノ襖、口キンニ唐紙ノ押畫、此墨繪ハ、先年江戸ニテ、御印籠ノ下繪ヲ養朴ニカヽセラレタル由、名印アリ、引手ハ先年拙○山科道安ガ求メシヲ召上ラレタル瓢箪ノツル也、水指ナンバン、